

2019 年 2 月 17 日（日）「永遠に共にいます神」

マタイ 22:23-33

23 その日、復活はないと言っているサドカイ人たちが、イエスのところに来て、質問して、
24 言った。「先生。モーセは『もし、ある人が子のないままで死んだなら、その弟は兄の妻を
めとって、兄のための子をもうけねばならない』と言いました。25 ところで、私たちの間に七
人兄弟がありました。長男は結婚しましたが、死んで、子がなかったので、その妻を弟に残し
ました。26 次男も三男も、七人とも同じようになりました。27 そして、最後に、その女も死
にました。28 すると復活の際には、その女は七人のうちだれの妻なのでしょう。彼らはみ
な、その女を妻にしたのです。」

29 しかし、イエスは彼らに答えて言われた。「そんな思い違いをしているのは、聖書も神の
力も知らないからです。30 復活の時には、人はめとることも、とつぐこともなく、天の御使い
たちのようです。31 それに、死人の復活については、神があなたがたに語られた事を、あな
たがたは読んだことがないのですか。32 『わたしは、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブ
の神である』とあります。神は死んだ者の神ではありません。生きている者の神です。」33
群衆はこれを聞いて、イエスの教えに驚いた。

【序論】

私たちは目まぐるしく移り行く世に生きております。この 20 年の間に IT 関連の業界
は著しい発展を見せ、スマートフォンは一人一人の手に渡り、まことに便利な世の中にな
りました。また最近では AI の台頭に伴い、これまで人間が携わってきた業種の多く
が失われていくだろうとも言われています。私たちも例外なくその世界に生きている訳
ですが、そのような激動の世にあって、決して変わることはないものが求められている
のも事実です。恐らく、その役割を担っているのは宗教でしょう。宗教は科学技術がど
んなに進歩しても損なわれることのない真理を持っている。私たちはその中でキリスト
教と出会い、聖書の中にこそ不変の真理と希望があることを知ることになったのです。
特に、今日の箇所が扱っている死の問題、死後の命の問題というのは、科学には担えな
い分野でありましょう。それだけではありません。心の問題、罪の問題、赦しの問題な
ど、これらはどんなにお金を積んでも、知識や能力を得ても解決できないものであるこ
とを、私たちは知っているはずです。このような時代だからこそ、聖書が教えている真
理を語り続ける責任は重いと考えております。

【本論】

今日は主イエスと敵対者の問答の二つ目を学んでまいります。前回はパリサイ派とヘロデ党という全く立場の異なる二派が結託してやってきてローマ帝国への税金の是非を問うという内容でした。今日はサドカイ派という一派が登場します。

本論 1. サドカイ人の論法

その日、復活はないと言っているサドカイ人たちが、イエスのところに来て、質問して、言った。「先生。モーセは『もし、ある人が子のないままで死んだなら、その弟は兄の妻をめぐって、兄のための子をもうけねばならない』と言いました。(22:23-24)

サドカイ派というのは祭司貴族から成る党派であり、その意味で大変お金を持っていた。お金があるということは政治的な力を持っているということで、当時の最高議会議員の大半はサドカイ人だったようです。中には地主出身の者もあり、神殿を本拠としてイスラエルの民の上に君臨していました。神殿で祭司職を担っていた人々は皆サドカイ人でしたが、それだからといって宗教的な団体だったということではなく、むしろ政治団体と言った方がよいでしょう。時の権力者と結びつき、自国の平和と安全のためとあらばローマ政府の協力を得ることも ^{やぶさ} 吝かではないという立場を採っていました。

サドカイ人の聖書観にもふれておきましょう。彼らが正典として認めていたのはモーセ五書のみであり、預言書にも二次的価値しか認めず、殊にパリサイ人が重んじていた父祖伝来の口伝は排除していました。ある意味では保守的と言えますが、モーセ五書には死者の復活にまつわる思想が（彼らの的には）出てこないのです。死後の審きも復活も、霊の存在も天使の存在も認めてはいませんでした。天使に関する言及は、実は五書にしっかりと出てくるのですが（創世記 16:7-13、18:1-15 等）、それでも彼らは信じなかったのです。彼らは自分たちの都合のよいように聖書を読んでいた。合理主義的で、現世がすべて。来世などどうでもよい。こういう人々が神殿宗教を牛耳っていたのですから、イスラエル宗教が墮落するのも致し方ないことだったのです。もしキリスト教会で死後の審き、復活などを嘲笑うようなことが教えられていたら、当然その教会は健全ではいられないでしょう。もし死後の世界がないと考えれば、人間はどういう生き方をしようになるか。刹那的になるのです。今が良ければそれでよい。悪いことをしても審きなどないのであれば、どんな生き方をしてもいいということにならないでしょうか。

さて、このサドカイ派の人々が持ちかけてきた議論は「復活」にまつわる事柄でした。ここで彼らが持ち出しているのは、申命記 25:5-10 の律法です。

兄弟がいっしょに住んでいて、そのうちのひとりが死に、彼に子がない場合、死んだ者の妻は、家族以外のよそ者にとついでにはならない。その夫の兄弟がその女のところに、入り、これをめとって妻とし、夫の兄弟としての義務を果たさなければならない。そして彼女が産む初めの男の子に、死んだ兄弟の名を継がせ、その名がイスラエルから消し去られないようにしなければならない。しかし、もしその人が兄弟の、やもめになった妻をめとりたくない場合は、その兄弟のやもめになった妻は、町の門の長老たちのところに行って言わなければならない。「私の夫の兄弟は、自分の兄弟のためにその名をイスラエルのうちに残そうとはせず、夫の兄弟としての義務を私に果たそうとしません。」町の長老たちは彼を呼び寄せ、彼に告げなさい。もし、彼が、「私は彼女をめとりたくない」と言い張るなら、その兄弟のやもめになった妻は、長老たちの目の前で、彼に近寄り、彼の足からくつを脱がせ、彼の顔につばきして、彼に答えて言わなければならない。「兄弟の家を立てない男は、このようにされる。」彼の名は、イスラエルの中で、「くつを脱がされた者の家」と呼ばれる。(申命記25:5-10)

これは「レビラート法¹」と言って、子ども（相続者）なくして夫が死んでしまった場合、その兄弟が遺された妻を娶り、家系を絶やさないようにするという律法でした。現代日本では「家」を存続させなくてはならないという意識が薄らいできておりますが、かつてはお家断絶とならないよう、養子を迎えるなどの手立てが取られたそうです。私の妻の父も、その父親が戦争で亡くなったため、父親の弟が遺された妻と結婚したという経緯があります。イスラエルにおいては特に家意識が強く、実際にこのようなレビラート法が適用される事例は少なくなかったのでしょう。しかし、中にはそれを望まない兄弟もいて、問題になったこともあったようです。一例として、タマルという女性の夫であったエルが死んだため、オナンという弟がタマルを娶りましたが、彼はタマルとの間の子どもの望まなかったという記録が残されています(創世記 38 章)。

さて、サドカイ人はこのレビラート婚を引き合いに、7人兄弟が次々と一人の女性を娶ったが、ついに誰も子孫を残すことなく死に、その女性も死んだという話を作り出しました(25-28 節)。この意味のない話は、思うに復活を信じるパリサイ人を困らせるために考え出されたものだったのでしょう。彼らの論理は、復活などというものがあれば、来世では一人の女性を巡って7人の男が奪い合いの喧嘩をすることになるのではないかという矛盾を突こうとするものです。サドカイ人の目的は今ひとつ読めないのですが、主イエスの權威に一点の染みをつけたかったのでしょう。

¹ 「レビラート」という言葉はラテン語の「レビル (levir)」(夫の兄弟) に由来する。1 世紀のユダヤ社会では、恐らくこの法律は死文化していた。レビラート法は、ミシュナ時代(3 世紀)になると守らなくてよいものとされた。(中澤《下》p.236)

本論 2. 御使いのよう

しかし、イエスは彼らに答えて言われた。「そんな思い違いをしているのは、聖書も神の力も知らないからです。(22:29)

姑息^{こそく}な質問者に対し、気持ちいいほど明快な切り返しです。主イエスはサドカイ人を「**聖書も神の力も知らない**」と頭ごなしに叱責しました。そもそもサドカイ人が「思い違い」をしていたこととはどういうことでしょう。

第一に、あまりに現世的な世界観で生きていたため（この世の安泰ばかりを求めていた）、聖書を（たとえモーセ五書のみであったとしても）その程度の範囲にしか適用できなかった。自分の狭い枠組みの中に無限なる神を押し込めていたのです。

第二に、復活思想そのものに対する誤解がありました。パリサイ人を含め、当時のユダヤ教徒たちは復活を現在の命の延長のように捉えていた。（キリスト教的復活思想の中核とも言える）真新しい世界で真新しい命を受けるという希望がなかったのです。

これらの事柄について、30 節以下の主イエスの教えからより詳しく考えてまいりましょう。

復活の時には、人はめとることも、とつぐこともなく、天の御使いたちのようです。(22:30) まず、主イエスは復活時の人間の状態が、現在の我々の姿とは全く異なるということを教えています。これは私たちの信仰・希望とも深く関わる話なので、心して聞かなくてはなりません。主イエスを信じて死んだ者には、滅びゆく地上の肉体の代わりに、朽ちることのない栄光の体が与えられます。私たちの中で一体誰が自分の体に関して 100% の満足を持っているのでしょうか。病気があり、衰えがあり、痛みがあり、歪みがあります。私も 30 代で皮膚炎、コリン性蕁麻疹、悪性腫瘍と、様々な病を経験しました。そして、もはや 20 代までの上昇気流に乗ったような勢いはなく、肉体は死に向かっていくことを実感しています。もし復活の体が今の体の持ち越しであるなら、一体どんな希望があるのでしょうか。日本人の多くは輪廻転生（死んであの世に還った霊魂が、この世に何度も生まれ変わってくるという思想）的なものの捉え方をする。繰り返し繰り返しこの同じ世を生きなくてはならないのであれば、そこには絶え間ない苦しみがあるでしょう。

しかし、聖書が教える復活は、それとは全く次元を異にしているのです。永遠の神の国は、現在の世とは決定的に断絶している（と同時に連続性もある）。すべてが新しく造り直されるのです。そして、「**もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない**」（黙示録 21:4）。病気というものは壊滅するでしょう。貧困もなく、すべてにおいて満たされ、不快なこととは経験したくても経験することができない。与えられる肉体は「栄光の体」であり、

一人一人が神と密接に結びつき、誰もが神の家族であるため、（恐らく）男女間の一対一の結び合いはなく、妬みや独占ということも起こらないでしょう²。

本論 3. アブラハム、イサク、ヤコブの神

主は更に続けます。

それに、死人の復活については、神があなたがたに語られた事を、あなたがたは読んだことがないのですか。『わたしは、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあります。神は死んだ者の神ではありません。生きている者の神です。」(22:31-32)

ここでは出エジプト記の聖句が引用されています。出エジプト記はモーセ五書の一つであり、サドカイ人が正典としている書です。つまり、主イエスは彼らの土俵に上がり、「ほら、こんなところにこれほど明確な復活の証拠があるではないか！」と教えておられるのです。サドカイ人の無意味な質問を、深い真理を教える機会に変えてしまう。

それにしましても、なぜ「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」と述べるのが復活の証言となるのでしょうか。私は当初、いくら読んでもこのことが理解できなかったのです。しかし、学んでいくうちに、理解の鍵は引用されている出 3:14-16 の記事にあることが分かってきました。この箇所を読んでみましょう。

神はモーセに仰せられた。「わたしは、『わたしはある』という者である。」また仰せられた。「あなたはイスラエル人にこう告げなければならない。『わたしはあるという方が、私をあなたがたのところに遣わされた』と。」神はさらにモーセに仰せられた。「イスラエル人に言え。あなたがたの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、主が、私をあなたがたのところに遣わされた、と言え。これが永遠にわたしの名、これが代々にわたってわたしの呼び名である。行って、イスラエルの長老たちを集めて、彼らに言え。あなたがたの父祖の神、アブラハム、イサク、ヤコブの神、主が、私に現れて仰せられた。『わたしはあなたがたのこと、またエジプトであなたがたがどういううちを受けているかを確かに心に留めた。』

エジプトで奴隷とされていたイスラエル人の救世主として、モーセが選ばれました。し

² 復活後の男女の関係についての N.T.Wright の見解は特筆に値します。

「新しい創造が重要だというのは、それが新しい創造であるからだ。神の新しい世界では、子をもうけることは必要ない（死がないため）といわれていた。だが、聖書がその新しい世界について語るときに用いるイメージは、子羊の婚姻（『黙示録』）というイメージや、古い世界の胎から新しい世界が生まれるというイメージ（『ローマ書』）であり、それは次のことを示している。すなわち男女の関係が、創世記の第一章と第二章の創造物語の中心に織り込まれているのは、偶然の一致や一次的現象などではなく、そうした創造そのものの中に、神が与えたいのちと、子をもうける可能性のある事実を象徴的に語っているのである。」

(N.T.Wright 『クリスチャンであるとは』 あめんどう、2015、p.326)

かし、モーセはこの召命に尻込みし、幾度も断ろうとします。自分などが神に遣わされたと言っても、一体誰が信じるだろうか。遣わした神の名を言ってみろと言われるに違いない。その時に自分はどうか答えればよいのか。そのようなモーセの不安に対し、神はご自身を「わたしはある」という者だと表現されました。

ところで、昨年 12 月に出版された新しい聖書訳『聖書協会共同訳』では、この部分が「私はいる」と訳し直されました。私自身はこの訳は大きな貢献だと思っています。と申しますのは、原文で使われている「ハーヤー」という言葉は、be 動詞的な「存在する」よりもむしろ、一般動詞的な「成る」を意味するからです。「私はいる」という訳が読者にイメージさせるのは「神が共にいる」(インマヌエル)です。つまり、「アブラハムと共におられた神が、モーセよ、あなたとも共にいるのだ。イサク、ヤコブと共にいたわたしがあなたと共にいるではないか！」という、神の現臨を表す言葉として響いてくる。

アブラハム、イサク、ヤコブは確かにモーセ時代には死んでいました。しかし、神が彼らと結んだ契約は、尚も生き続けていた。その契約にモーセもあずかる。そして、ダビデに、キリストに(キリストによって契約は完成する)、すべてのクリスチャンに受け継がれていく。燃える柴がいつまでも消えることがないという不思議な記事も出てきます。ここには、永遠に続く契約のイメージがあるのです。神はひとたび人間と結ばれた契約を、決して捨てることはなさらない。そして、その契約にあずかった人は世の終わりに新しいいのちを受け、永遠に生きる者とされる。その契約はとこしえのものとなるのだ。そのようなメッセージを、主イエスはこの記事に読み取っておられたのです。

【結論】

このように、キリスト教とは死後の栄光の希望を語る宗教であります。アブラハム、イサク、ヤコブと契約を結ばれた神は、私たちの神でもあられる。この方と契約を結んだ者は、いつまでも神と共にいるようになるのです。キリスト教はこのように確かに死後の希望を語っています。しかし、ただその日を待ち望んで、この地上の苦しみを耐え忍べと教えているのではありません。私たちはこの地上にあって、永遠なる神との契約のうちに歩み始めているのです。二度と破られることのない契約の下に、安心し、平安をもって生き、そして死ぬことができる。その希望に立って、私たちは生き生きとした人生を歩んでいきたいと思います。「私はいる」「あなたと共にいる」「永遠に共にいる」。主イエスの約束を握りしめて歩もうではありませんか。

【祈り】

命の主よ。あなたの御言葉は希望に満ちています。苦しみ多き世に生きる私たちが、あなたとの関係によって、永遠に生きる者とされました。この人生の繰り返しではありません。決定的な断絶を経て、栄光の神の国に生きる者とされたのです。尚暫しの人生ですが、精一杯生き抜きます。この地上の人生さえ、既に永遠に包まれているからです。どうぞ私たちの使命を果たさせてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

「わたしはいる」者として、すべての時代の聖徒の神であり給う、父なる神の愛。
神と人との契約を完成させ、信ずる者に永遠のいのち、栄光のからだを約束し給う、主イエスキリストの恵み。

後の世ばかりではなく、今の世を神と共に歩ませ、その人生を終わりまで喜びと平安で満たし給う、聖霊の親しき交わりが、
我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。